国　語　科

国 語 科

実社会や実生活に生きて働く国語の資質・能力を育成する授業の創造

～自ら言葉を吟味する必要のある単元の開発～

大　塚　悠　希
碓　氷　愛　実
大　谷　　颯
長　島　優　香

1　研究主題

本校国語科では，昨年度，研究主題を「実生活や実社会に生きて働く国語の資質・能力を育成する授業の創造～自ら言葉を吟味する必要のある単元の開発～」とし，研究を行った。

授業において，自ら言葉を吟味することで，生徒が文章中の言葉について深く考え，それらを根拠に意見を交流したり，言葉の辞書的な意味や文脈上の意味を考えながら表現したりする姿は見られたものの,生徒自身が学習した語彙を日常生活で吟味しながら活用することには課題が見られた。

昨年度までの経緯を受け，また本校の研究主題を踏まえ，令和５年度は引き続き，標題の主題と副題を掲げて研究を進めている。副題を「自ら言葉を吟味する必要のある単元の開発」としたのは，国語科における「挑戦心」を，生徒が主体的に言葉による見方・考え方を働かせようとしている状態，つまり生徒が学習の中で，対象と言葉，言葉と言葉との関係を，言葉の意味，働き，使い方等に着目して捉えたり問い直したりして，言葉への自覚を自ら高めようとしている姿であると定義付けたからである。

また，令和４年度の第３学年の生徒 130 名に「国語の授業において『挑戦する』とは，どのようなことだと思いますか」というアンケート調査を行ったところ，以下のような回答が得られた。

- 「国語力を使うもの（話す，聞く，書く，読む）をそれぞれつなげて，よりよい能力をみにつけていくこと。また，そこから見える自身の長所，短所から，自分について知ること。」
- 「視野を広げ，いろいろな視点から考えること。」
- 「友だちの意見を，いろいろなこと（文など）とつなぎ合わせること。」
- 「誰も考えないような国語の正解に足を踏み入れ，自分の国語の世界観を作ること。」

これらの回答から，生徒たちは，協働的な学びの中で，自身の資質・能力を高めたり，学習したことを有機的に関連づけ，自分の考えを深めたり広げたりすることを「挑戦」と捉えていることがわかった。これを踏まえつつ，本校の総論で設定された三つの手立てを基に研究を進めている。

2　研究内容　※○数字の項目は本校の重点とした手立てを示している。

①困難に向き合い，試行錯誤するなどの挑戦する学びの場の設定

○単元名「『いま』を切り取るコラムを書こう」（３年）

第３学年では「書くこと」の指導事項である「表現の仕方を考えたり資料を適切に引用したりするなど，自分の考えが分かりやすく伝わる文章になるように工夫すること。」（〔思考力，判断力，表現力等〕Ｂ⑴ウ）ができるように，新聞の一面コラムを書く活動を設定した。

挑戦する学びの場の設定として，今回はコラムを２作品作成するようにした。従来の「書くこと」の活動では，一単元で一つの作品を作成して，推敲したり，読み合ったりすることが多かった。それでも一定の成果をあげることができたが，どうしても授業の中で「書いて終わり」になってしまうことが課題であった。今回のように，２作品を書くようにすることで，１作目で見つかった改善点を意識して書けるようになったり，友人の作品に刺激を受けて表現の工夫を意図的に取り入れられたりするようになった。ある生徒は，２作品目のコラムを次のように記述している。

＜マフラーを巻きつけられて溶ける僕＞。伊藤園の新俳句大賞で都道府県賞を受賞した 15 歳の俳句だ。マフラーは恋心も表現できる冬の必需品。マフラーを大切な人にそっとかけたくなるような句だ。（…中略…）◆そんな中，早朝から悩む服装問題が解決できると「気温別服装イラストメモ」がツイッターで話題沸騰。（…中略…）◆SNS を通して人と人が小さな悩みを打ち明け，解決できる時代に世の中の便利さと人間の温かさが表れる。誹謗中傷，差別発言やらの問題が膨らみつつあるが，やはりこうした本来の使い方を忘れてはいけない。あなたは害する人になるのか，それとも声をそっとかけてあげられる人になるのか。未来の SNS もあなた次第で変わる。

１作品目では，自分の伝えたいこと具体例を挙げて書くことに始終してしまったが，２作品目では，反省を生かして季節の話題と SNS の話題を取り合わせて書くことができている。また，友人の作品を参考にして，冒頭と末尾で掛け言葉を使うことに挑戦し，自分自身の納得のいく作品になった。一単元で２作品を作成することは，授業の当初は生徒も不安の声をあげていたが，目に見えて自分自身の成長を感じることができた生徒が多く，効果的な学びの場の設定となった。

○単元名「合意形成のできる話し合いをプロデュースしよう」（３年）

第３学年では，「話すこと・聞くこと」の指導事項である「進行の仕方を工夫したり互いの発言を生かしたりしながら話し合い，合意形成に向けて考えを広げたり深めたりすること。」（〔思考力，判断力，表現力等〕A⑴オ）ができるように，「合意形成とはそもそも何か」，「どうしたら合意形成に向かうことができるのか」という問いを立て，合意形成のできる話合いの場を企画する活動を設定した。従来，話合いの授業においては，その話題やシチュエーションを教師が決めることが多かった。本単元でいえば，合意形成の必要がありそうな場面や話題を教師が決めるということである。それに沿って生徒が学習活動を行っていけば，「合意形成」の場面は生まれるだろうと想定できるが，それは本当に生徒自身が学習の中でつかみ取った資質・能力といえるのかが疑問に思ったため，生徒自身に合意形成のできる話合いの場を企画させることにした。話合いの場を企画する側と実際に企画に沿って話し合う側に役割を交代しながら，１グループにつき３回の話合いの企画・合意形成の検証ができるようにした。

ある班では，当初は「中学生にとってスマートフォンの利用時間は１日何時間がよいか」といった議題を計画していたが，準備の段階で，「その議題は本当に合意をとる必要のあるものなのか」「そもそも，合意形成が迫られる場面とは，簡単には決められず，慎重な検討が必要なもの。人それぞれだね，で終わらないものなのではないか」といった意見が挙がり，「そのためには，話合いに参加する人が自分の立場できちんと意見を言える環境が必要である」や「特定の人が折れたり言い負かされたりするような状況は合意形成とは言えない」といったやりとりが行われ，合意形成に向かうために話合いで必要な要素について試行錯誤しながら考えを深めている様子が見られた。話合いの企画を通して，生徒の「合意形成」観が深まったことによって，実際の話合いの中では，司会の有無に関わらず，参加している生徒が，発話量の少ない生徒に問いかける場面や，それぞれの意見の共通点を整理して，論点を明確にしようとしている姿が生まれた。

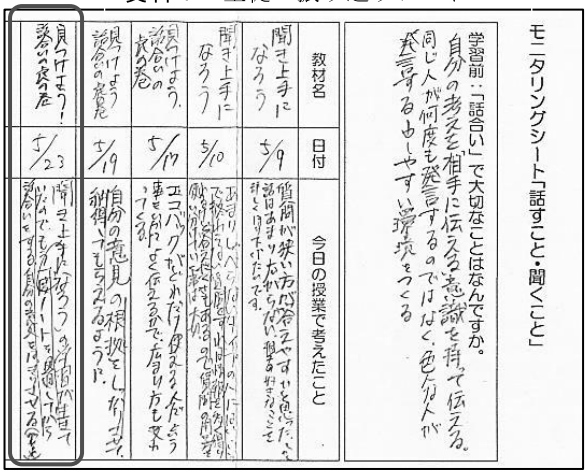
②生徒自らの「挑戦心」の意識化

○領域ごとの学習の振り返り（２年）

「挑戦心」を生徒自身に意識させるためには，自らの学習を見直し，調整していくことが必要不可欠である。一昨年度は単元ごとに振り返りのためのワークシートを活用した。生徒は単元内でどのような学習を行ったのか，これまでの学習を振り返ったり，試行錯誤したことを記録したりすることができていた。しかし，それらが単元の中の完結してしまうという課題が新たに見られるようになった。

そこで，領域ごとの振り返りのためのワークシー

資料１　生徒の振り返りシート



ト（モニタリングシート）を作成し，生徒が１年間を通して，領域での学習内容を有機的に関連付けながら学習に取り組めるように指導を行っている。**【資料１】**

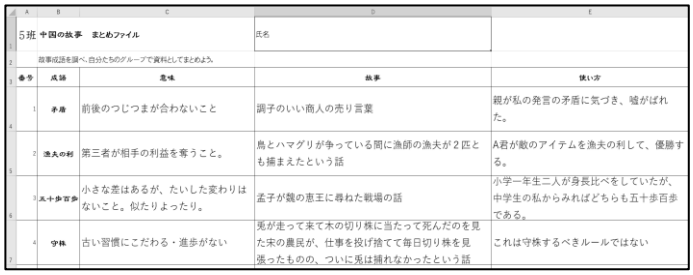
生徒の記述から単元同士のつながりを意識している様子が見られるようになった。それぞれの単元がつながりをもつことで既習事項を活用し，新たな課題を解決しようとする生徒の意識も見られるようになった。

③教師や仲間との協働的な学びの充実の手立て

○単元名「故事成語と自分の生活を結び付けて考えよう～私の附属中物語を作ろう～」（１年）

第１学年では，「書くこと」の指導事項である「根拠を明確にしながら，自分の考えが伝わる文章になるように工夫すること。」（〔思考力，判断力，表現力等〕B⑴ウ）ができるように，中学校生活について故事成語を用いて感じたこと，考えたことを書く言語活動を設定した。学習の過程では，故事成語の概要について学習し，故事成語の言葉の意味や元になった故事を調べた。その際，協働的な学びの充実のために一人一台端末を利用して「中国の故事まとめファイル」を共同編集で作成した。**【資料２】**

資料２　中国の故事まとめファイル



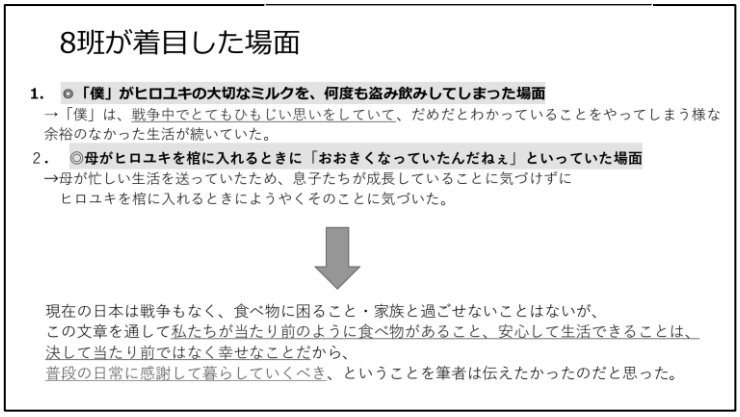
	A	B	C	D	E
1	5班 中国の故事　まとめファイル			氏名	
2	故事成語を調べ、自分たちのグループで資料としてまとめよう。				
3	番号	成語	意味	故事	使い方
4	1	矛盾	前後のつじつまが合わないこと	調子のいい商人の売り言葉	親が私の発言の矛盾に気づき、嘘がばれた。
5	2	漁夫の利	第三者が相手の利益を奪うこと。	鳥とハマグリが争っている間に漁師の漁夫が２匹とも捕まえたという話	A君が敵のアイテムを漁夫の利して、優勝する。
6	3	五十歩百歩	小さな差はあるが、たいした変わりはないこと。似たりよったり。	孟子が魏の恵王に尋ねた戦場の話	小学一年生二人が身長比べをしていたが、中学生の私からみればどちらも五十歩百歩である。
7	4	守株	古い習慣にこだわる・進歩がない	兎が走って来て木の切り株に当たって死んだのを見た宋の農民が、仕事を投げ捨てて毎日切り株を見張ったものの、ついに兎は捕れなかったという話	これは守株するべきルールではない

このファイルは「故事」「意味」「使い方」が一覧表で整理できるようになっている。共同編集によって辞書やインターネットで得た情報を量的に高めることができ，それをクラス全員が閲覧できるため，生徒自身の班では調べることがなかった新たな故事成語を発見できていた。

○単元名「場面を結び付けて物語を読もう」（１年）

第１学年では，「読むこと」の指導事項である「目的に応じて必要な情報に着目して要約したり，場面と場面，場面と描写などを結び付けたりして，内容を解釈すること。」（〔思考力，判断力，表現力等〕C⑴ウ）をねらいとし，『大人になれなかった弟たちに……』では，物語の場面や描写を結び付けて，新たに解釈したことを話し合う言語活動を設定した。作品を読み，班で場面を選択し，場面や描写に注目させ新たな意味付けを行い，それをプレゼンテーションソフトでまとめた。**【資料３】**

資料３　生徒がまとめた様子



8班が着目した場面

1.　◎「僕」がヒロユキの大切なミルクを、何度も盗み飲みしてしまった場面
→「僕」は、戦争中でとてもひもじい思いをしていて、だめだとわかっていることをやってしまう様な余裕のなかった生活が続いていた。

2.　◎母がヒロユキを棺に入れるときに「おおきくなっていたんだねぇ」といっていた場面
→母が忙しい生活を送っていたため、息子たちが成長していることに気づけずに
ヒロユキを棺に入れるときにようやくそのことに気づいた。

現在の日本は戦争もなく、食べ物に困ること・家族と過ごせないことはないが、
この文章を通して私たちが当たり前のように食べ物があること、安心して生活できることは、
決して当たり前ではなく幸せなことだから、
普段の日常に感謝して暮らしていくべき、ということを筆者は伝えたかったのだと思った。

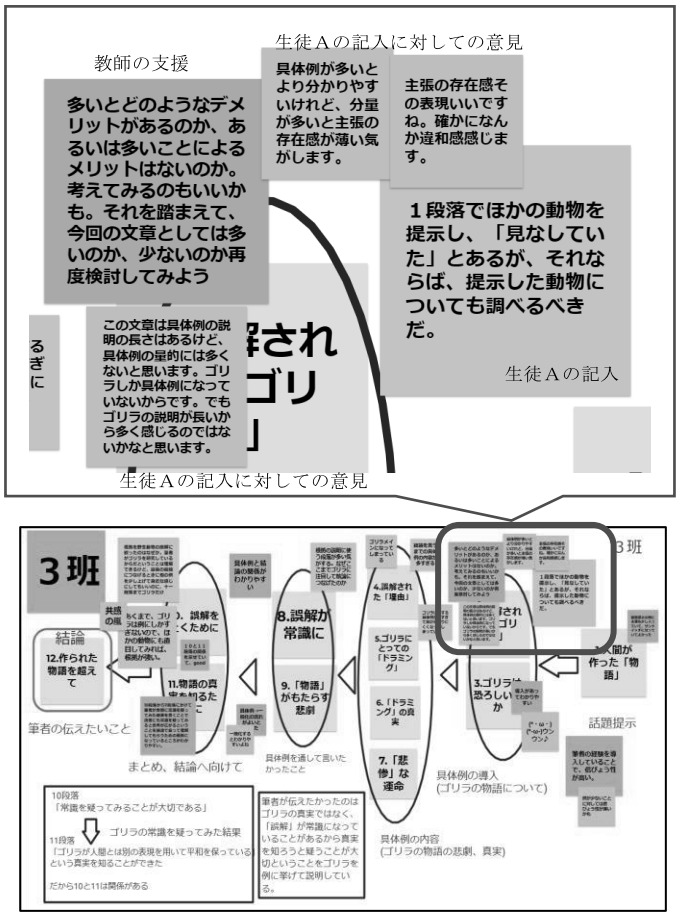
プレゼンテーションソフトを活用することで，生徒それぞれの考えが即時的に見ることができ，より活発に話合い活動を行う姿が見られた。話合いの中で，生徒からは「僕はかくれて，ヒロユキの大切なミルクを盗み飲みしてしまいました。」という場面と「母が，大きくなっていたんだね，とヒロユキのひざを曲げて棺に入れました。」という描写に注目して，「私たちが当たり前のように食べ物があること，安心して生活できることは，決して当たり前でない，幸せなこと」といったように作品の内容を解釈しながら，読みを深めることができていた。

○単元名「批判的に読むとはなんだろう」（３年）

第３学年では『作られた「物語」を超えて』を用いて，「文章を批判的に読みながら，文章に表れているものの見方や考え方について考えること。」（〔思考力，判断力，表現力等〕C⑴イ）をねらいに授業実践を行った。

本学年の生徒は，言葉や描写に注目しながら文章を読むことができるようになってきた。一方で，

資料４　デジタルホワイトボードの記述



「この登場人物はいなくても，物語に大きな影響がない。」「この具体例はなくても説明には困らない。」といったように部分に注目して，全体との関係を踏まえずに読む様子が散見されるようになった。第３学年では批判的な読みをし，文章について評価をすることが求められている。しかし，評価するためには，第２学年で学習した，「文章全体と部分に注目しながら，主張と例示の関係や登場人物の設定の仕方を捉える」ことが必要不可欠である。そこで，文章の中心的な部分と付加的な部分について確認することをねらいとして，本単元では，まず形式段落ごとに小見出しを考える学習を行った。その後デジタルホワイトボードを用いて，小見出しを文章の構成に合わせて並び替え，文章全体の構成を捉えさせた。小見出しを基にすることで，段落同士の関係を踏まえながら，文章を読み直す様子が見られた。さらに，多色の付箋を用いて，文章の構成や論理の展開，表現の効果について，良いところや納得しづらいところについて自身の考えを記入させた。加えて，友だちの記入した内容に対しての意見や質問を記入することで，デジタルホワイトボード上で協働的に考えを深めるとともに，通常の話合い活動では記録が残りにくい話合い活動の軌跡を，生徒が見返すことができるように留意し，授業を行った。また，教師は付箋を活用しつつ，班ごとの話合いに参加し，ねらいに迫る記入や考えを深めたいところについてアドバイスを行った。**【資料４】**

ある班では，「結論の部分が分かりづらく，まとめの部分に納得がしづらい。」といった意見が出ていたが，さまざまな色の付箋を活用し文章全体の構成を捉えながら，議論を重ねているうちに，「筆者は人類学や霊長類学者であり，本当に主張したいのはゴリラの悲劇とゴリラが人間とは異なる方法で平和を保っていることなのではないか。その部分を読者にしっかりと伝えるために，結論の部分は主張を補うように書かれていると感じた。だから，ゴリラのことに関しては納得できるが，人間の言葉に関する部分は根拠が足りなかったり，分かりづらく感じたりするのではないか。」とそれぞれの考えを共有し，相互に関連付けながら，新しい考えを生み出している姿が見られた。このような学習方法には，協働的な学びを通して，他者の考えを聞き，自分の考えを再構築することができたと生徒に実感させる一定の効果があると感じた。

３　成果と課題

国語科では，実社会や実生活に生きて働く国語の資質・能力の育成を目指し，生徒が文章中の言葉について深く考えたり，それらを根拠に意見を交流したりすることを重点として，授業実践を行ってきた。年度当初の学級活動では，学級目標やスローガンを決定する活動を行った。その中で言葉のニュアンスや言葉がもっている印象に着目し，ときには一人一台端末や類語辞典を活用し，言葉を吟味しながら，話合いを行っている姿を見ることができた。これは授業の中で，言葉を吟味する重要性やおもしろさを実感することができているからだと考える。

効果的な学習方法について研究を進める中で，協働的な学びが生徒一人一人の資質・能力の育成にどのような効果があったのかを見取る方法について検討の余地があると感じる。今後は，指導と評価の一体化について改めて目を向けて，さらに研究を進めていきたい。